

特集

芸文協二代目会長
村上正治先生 生誕一〇〇年

県文化の礎を築いた

村上先生

千葉交響楽団協会

理事長 服部 驍

千葉県の文化活動、なかんずく音楽文化が隆盛を極めていることは、どなたも認められるところですが、これは偏に村上正治先生の存在なくしては語れません。

戦後、荒廃した郷土にまず文化の灯火を灯そうと、村上先生の呼びかけで昭和二十六年に市川交響楽団（市響）を設立されました。まだまだ環境が整っていない時代でしたが、手作りのティンパニーや、オーケストラパート譜を先生自ら手書きで揃えたり、大変ご苦勞をされました。

私は、中・高校生の頃、しばしば千葉市内の学校などで演奏する市響を楽しく聴いた記憶があります。しばらくは市響が唯一のオーケストラとして孤軍奮闘していました。その頃から先生は広く県内各地にオーケストラが誕生することを願って

ても充実した文化活動を展開しているのも偏に先生のご尽力の賜物と言えるでしょう。

飾らぬ人柄で、仕事に当たっては常に周囲の人を信じて任せ、組織をリードしていく、そんな村上先生の志を引き継いだ我々後輩は、更なる発展の為に努力していきたいと思います。

村上先生のちから

市川市芸術文化団体協議会副会長
市川交響楽団協会副理事長

星 乗昭

私は大学のオケ部を昭和四十四年に終えて、市川交響楽団に入団いたしました。すぐに庶務係となつて「市響ニュース」を発行したあと、インスペクター、幹事長、事務局長として村上先生のお側に三十四年間、足下で薫陶をうけてまいりました。音楽界での偉大な功績は書かれている通りです。私が

日頃から接していて幾つか心に残ることがありました。一つは、市響の仕事で頻繁に先生のお宅に伺うのですが、その都度要件の前に「ちよつと待って」といわれてコーヒーとお菓子をを出してくださいさるのです。毎

回で、頻繁ですから、これはなかなか真似の出来ることではありません。人を大切にされる先生のおもてなしの気持ちに伝わって、先生のためにも頑張ろうという気持ちになるのです。

また、先生の音楽に対する情熱の凄さはいろいろなところで見受けられます。先生は毎週火曜日に行徳混声合唱団、木曜日に市川混声合唱団を奉仕で指導されていましたが、団員から、毎回謝礼金をお渡しすべきだ、ということになったのです。しかし先生は封筒のまま協会に出されました。それどころか、給料やボーナスなど私財をずっと市響などにあてておられました。家計のやりくりにも奥様は大変だったようです。

昭和五十年に市響ジュニアオケが創設されました。練習の時ヴィオラの楽器が足りないということになって、小岩にある私の家に急遽来られ、いくつかわるヴィオラの一台を持っていかれました。俊敏な実行力です。

市響協会は毎月一回先生のお宅で幹事会を開いておりました。ひとつの演奏会を開くのはこれだけの仕事があると言つて、仕事の一覧表を配られたのです。どうか皆さんで少しでも



▲芸文協二代目会長
村上正治氏

仕事を分担して下さい。と言われました。プログラムの表紙、ポスターは第一回からずっと先生の手書きでした。そして「僕は毎日三時間しか寝ていないけど頑張っているよ」と言われた言葉が身にしみました。

村上先生との絆



前事務局長

川島 真知夫

「先生、それは違います」

村上先生と私との絆は「先生、それは違います」との行政担当者の発言がきっかけです。

当時、私は茂原市文化協会の会長として芸文協の理事会に出席していました。村上会長のご発言を無視して、担当者は全く違った方向に誘導してしまいました。理事会に出席して間もない頃でもあり、そのときは、発言をさし控えましたが、組織としてあるべき姿ではないと感じ、親しくさせていただいていた故加倉井副会長に、感じてい

ることを率直にお話いたしました。間もなく、村上先生から、事務局長就任の依頼がありました。

「海賊と呼ばれた男」

この本は、今年「本屋大賞」を受賞し、ミリオンセラーになっていく本です。戦後間もなく、巨大国際石油資本メジャーの強圧に抗して、我が国で初めて、産油国から直接、日本のタンカーで石油を輸入し、世界中を驚かせた「日章丸事件」のモデルになった方が出光興産の出光会長です。

話は前後しますが、村上先生は、全日本文化団体連合会（全文団連）会長をされていたので、文化活動に必要な資金を、理解のある企業にお願いしていました。出光興産の当時の会長との二人の会話は、お互いの無事を確認される程度のごく簡単なものでしたが、協賛金は翌日、事務局に振り込まれていました。

宮沢賢治から道後温泉まで

先生宅に定期的に伺うようになったのは、全文団連の事務局長を拝命したからです。しかし、全国の文化団体をお世話す

るような大役を、一人では果せそうもなかったもので、芸文協で知りあった、当時の習志野市芸術文化協会会長の高宮氏に、パートナーとしてお願いしたいと申し上げたところ、先生は愛車を飛ばされ高宮宅を訪れ、快諾が得られました。

先生宅に通った期間は、真に充実した日々でした。先生の自分のことより他人を思いやる姿勢、何事も全て受け入れる大きな心、決心されたら万難を排してもやり遂げる強いご意志など、多くのことを学びました。

全国の文化団体が一堂に会した「第二十七回全日本文化集会千葉大会」では、先生は「二十一世紀における地域文化の在り方」と題して基調講演をされました。分科会では、「各団体の抱える課題と期待」「地域の特性を活かした文化の創造」「心に響く表現活動」などについて参加者が活発な意見交換をされ、今後の文化活動推進の糧となりました。全国大会は、岩手県、愛媛県を始めとして各地域で開催されました。そしてその地方の最高の芸術文化の鑑賞、観光名所他でのおもてなしに、明日への活力を得ることができました。

再会

人の命には限りがあります。人類はDNAを子孫に残すことにより発展してきました。村上先生のご意志を引き継ぎ、次の世代にバトンタッチするのが、私達の使命です。

もし、村上先生と再会する機会に恵まれたとすれば、先生の現在の芸文協に対するご要望を代行して申し上げます。さて、人を正しく評価することは非常に困難なことです。芸文協内での表彰制度にあくせくすることは、余りにも偏狭な事柄です。

広く、大きく、外に向かって芸文協活動の発展のために、皆様の持つておられるエネルギーを最大限に発揮されること、全国の文化団体をここまで纏め上げた先生のご意志に報いる事柄と思います。小さな文化の芽は、いとおしく育むことにより大きな実が実りますが放置すれば、不幸な結果となります。

芸文協活動は、単に自分で楽しむだけでなく、他人にも喜びを与え、お互いの魂を高めあうとの、先生の信念をいまでも、蘇らせることを切望いたします。